

社会・経済を比較する(その十二) やうせ文化と ガチンコ文化

盛田 常夫

政府主催のタウン・ミーティングにおける「やらせ」が話題になっている。最近では新聞社主催の裁判員制度の討論会へのアルバイト動員が批判されている。しかし、対話集会とはいえ、大きな集まりでは「自由に意見を言うて下さい」と言っても、日本では自由闊達な意見交換が行われることはない。だから、集会を盛り上げるために、一定のシナリオや討論者の準備が不可欠だ。もちろん、何をどこまで準備するかは問題だが、手ぶらで「さあ、意見を言うて下さい」では済まないだろう。それでは「やらせ」を容認するのか。しかし、「白か黒か」のように問題を単純化しては事の本質を見失う。

日本社会では個人の意見を戦わせるといふ教育が行われていないし、どの集団でも自己主張することが嫌われる。どこでも、「根回し」なしに、即興的な議論で物事が決まることは稀である。一定の主張や方針を通すために、事前にいろいろな人に打診しながら個別の意見交換を行い、目処が立つたところで会議を開いて決める。これが日本社会の典型的な意見集約プロセスだ。もつとも、国際会議や外交交渉でも、その場で突然に新しい提案がでることは非常に稀で、事前交渉でほとんどが決まり、詰め切れない点だけが最終的な討議にかけられる。

それでは、日本社会全般に見られる「根回し」と国際交渉の事前交渉の違いは何か。日本の「根回し」ではほとんどすべてが事前に決められる。これこそ「完全やらせ」だろう。これにたいして、国際交渉ではほとんどの場合、事前に議論する論点が詰められ、そこに最後の交渉力が委ねられる。事前交渉にはない、激しい議論が戦わされる場が必ず残されている。「根回し」に慣れている日本人は、こうした本番の「ガチンコ」が苦手だ。「やらせ」に慣れきった日本人が、はたしてどこまで「ガチンコ」の舞台で自らを主張できるのか。それは戦後の日本が国際的な場で抱える問題そのものでもある。

学生との対話集会

もう一七年以上も前の話だからもう時効だろうが、私も「やらせ」に荷担した。荷担したというより、積極的に「やらせ」を仕組んだと言った方が良いかもしれない。歴史上初めて、日本の首相のハンガリー訪問が実現した一九九〇年一月、ベルリン演説を終えて最後の訪問地ハンガリーで、学生との対話集会が開催された。当初はハンガリーが海部首相の欧州遊説の目玉になるはずだったが、出発二ヶ月前にベルリンの壁が崩壊し、「ベルリン演説」に主役を取られた。そこで、当時の関大使が思案し、ハンガリーでは「経済大学学生との対話集会」を目玉にしたいと官邸へ提案された。ちょうど、少し前に英国のチャールズ皇太子がマルクス経済大学の学生を相手にした対話集会を持ったことがヒントになった。もつとも、海部首相の欧州遊説自体が、前年七月のブッシュ大統領(現大統領の父)のポーランド・ハンガリー訪問がベースになっていたのだが。

首相官邸が関大使の提案を受け入れた。そこで、専門調査員として大使館に赴任していた私が、この実行

何が欠けているか

学生との対話集会は無事終わり、首相一行もハンガリー側も、対話集会の成功を率直に喜んでいて、裏方としては今一つ割り切れないものを感じた。チャールズ皇太子はわざわざ経済大学講堂に設置されているカール・マルクス像を舞台に選び、その横で講演して質問を受けていたのを知っていたから、渡辺公使とも日本の政治家の意気地なさを嘆いた。日本では右翼が大騒ぎする前に、宮内庁や外務省が許さないだろう。それだけ英国の王室は懐が深い。日本では皇室どころか、政治家すら余裕を持って、聴衆の意見を受け止める舞台に立つことを嫌う。政治家本人より先に、秘書官などの付き人が失敗しないように、先回りしていろいろ指示をする。大使や公使にたいして、官邸の権威を借りて怒鳴りつけることも珍しくないのだ。これが日本外交の現状だ。

もつとも、国際会議や首相・大統領の演説は、事前に原稿が配られ、通訳もあらかじめ用意された文章を読むケースがほとんどである。ブッシュ大統領の演説も、当然のことながら事前にテキストが配布され、大統領は一字一句違えることなく演説を終えた。演壇の上にはノート判の薄いモニターが左右に設置され、そこにテキストが現れるようになっていた。あたかも原稿なしで話しているように見える工夫である。

自由闊達な議論には当然のことながら、討論に参加できる人数に制限がある。深い議論をしようと思えば、きわめて少人数に限る必要がある。「対話」と名付けられるような質疑応答が可能な規模も、自ら限定されるよう。どんなに多くても、二五〇名から二〇〇名が限界である。それを超えれば、対話などは無理で、講演になつてしまう。もつとも、聴衆が多くても、講演の後にい

役を引き受けることになった。経済大学のチャーク学長もザライ副学長も友人で、この企画を受け入れてもらうのに何の支障もなかった。討論会の場所の選定、大学構内における首相一行の動線などのロジ的な立案は何も問題はなかったが、二つの問題が頭を悩ませた。

舞台裏の仕事

一つは逐次通訳にするか、同時通訳にするか。もう一つは対話集会の質問リスト。

経済大学の大講義室には同時通訳のブースがあるので、間延びさせないで、臨場感を持たせるために同時通訳にすることを主張した。官邸と外務本省は答弁に時間的な余裕ができる逐次通訳を主張したが、渡辺公使に押し返してもらった。その代償だろうか、官邸側は事前に質問を集めよと指示してきた。これには驚いた。「対話集会は自由な討論の場だから、事前に質問を集めるのは不可能」と断つたが、日本を出発した一行から、連日、官邸秘書官が質問リスト送付を要求する矢の催促。これが日本の政治家の現状だから何とかしてくれないかと渡辺公使に泣き付かれた。総選挙を間近に控え、多数の日本の報道陣が取材する中で、失敗は許されないのだという。すぐに副学長に事情を説明し、質問リストを作成するので、そのシナリオでやって欲しいと伝達した。七つの質問を作成して首相一行に送付したら、すぐに回答も準備せよときた。そこから、細かな仕事が始まった。

それまでハンガリーでは日本語・ハンガリー語の同時通訳会議など行われたことがなかった。同時通訳にはかなりの訓練・経験と語学力を必要とする。そのような人材がいるはずがなかった。しかし、今回の場合は、質問と回答が事前に準備されているから、あたかも同時くつかの質問を受ける程度のことであれば、それほど人数を制限することもないだろう。

討議、対話、講演、質疑応答などいろいろな規模の集まりや方法はあるが、それぞれの意見表明にはそれなりの準備や手続きを設定することは不可欠である。その上で、何を自由に議論するのかを決めておく必要がある。初めから終わりまで、すべて事前に決めたものではテレビ番組と同じになつてしまう。いろいろな場で個人の意見を自由に表明できる能力は、学校教育から鍛えていく以外に方法はないが、日本の教育ではこれが一番欠けている。まさに日本の教育改革は、「やらせ」を必要としない個人の意見表明力の育成にあるはずだ。国際化時代に要求されているのは、まさにこのような能力なのだが、この面で日本は欧米にかなり水を空けられている。

ここ二ヶ月ほど、ハンガリーのテレビや雑誌のインタビューを連続して受けた。久しぶりに何本かのインタビュー番組に出たが、当地の番組収録はリハーサルなしの「ぶっつけ本番」である。どれも皆、収録が始まる五分前に来るだけで十分だという。事前の打ち合わせなしに、いきなりインタビューが始まる。インタビューは質問概要を記したメモをみながら、それをベースに即興的に質問してくる。撮り直しなしの一発勝負である。テレビには間(ま)は許されない。とにかく言葉を切らずに喋らなければならぬ。自分のことなら簡単に喋れるが、理論的にまとまったものを表現する場合、そう簡単に気の利いた言葉がでてこない。これはかなり場数をこなさないと駄目だということが分かった。それにしても、いきなりの「ガチンコ」もやり過ぎだ。もう少し、進行の打ち合わせがあつても良い。ここにも、「やらせ文化」と「ガチンコ文化」の違いを見た。

通訳しているかのように通訳することは難しくない。それでも、一人でこなすには無理があるので、ハンガリーで手配できる最高の人材を複数配置することにした。当時、ELTEの講師をしていたセルダヘイ氏(前駐日大使)に日本語からハンガリー語の部分を、同じくELTEの山路征典さんと貿易経済大学の佐藤紀子さんにハンガリー語から日本語の部分を担当してもらうことにした。このように分担することで、通訳者の負担がかなり軽減できる。前日に会場に集まってもらい、各自に担当の文章を渡してリハーサルもした。

気を遣ったのは、七つの質問の順番である。質問がランダムだと、答弁する方も通訳する方も混乱する。そこで、対話集会当日の朝、副学長室に学生代表を集め、七つの質問を短冊に切つて渡し、質問順を確認し、絶対に順番を間違わないように指示した。

最初に短時間の首相講演が終わわり、核心の質疑応答に入った。私は舞台の袖に隠れながら、会場の雰囲気や首相の答弁の様子を覗っていた。七名の学生諸君は次から次に手を挙げて質問し、会場は快い緊張感に溢れていた。即興的に質問しているように見えたが、すべてシナリオ通りであった。ところが、あまりに事がトントン拍子に進みすぎて、時間が余った。「少し時間があるの、後二つ質問を受けたい」と、司会のザライ副学長から予定外の発言が出た。壇上の首相は一瞬動揺した表情だったが、即座に会場から出た質問が良かった。首相がヨーロッパを訪問している間に、自民党の実力者がモスクワを訪問しているが、貴方は彼に對抗してモスクワに向かう必要があるのではないか。この質問で、会場から笑いが起こり、会場に張りつめた緊張が解けた。